3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎渡辺征二さん（男性／当時70歳・聴覚障害）
◎渡辺さんの奥様（女性／一緒にお話に参加していただきました）

閖上の家は、海から800mしかない場所。兄が迎えに来なければ、命を落としていた。

― 渡辺さんご夫妻 ―

― 土台だけ残った自宅 ―

地震直後

津波が来るとは思わなかった地震直後。兄の来訪によって津波から難を逃れる。

生まれも育ちも名取市閖上の渡辺さんは、地震が起きた時も閖上の自宅にいて、妻と二人で過ごしていました。揺れが大きかったので隣人の様子を見に行くと、特に避難する様子がなかったので、渡辺さんも自宅に戻り、近所にある田んぼの様子を見に行きました。するとその後すぐ、近くに住む渡辺さんの兄が自宅に駆けつけ「津波が来るから逃げろ！」と促してくれたのです。すでに道路には、30 ㎝程の水が流れ込んでいました。渡辺さん夫婦はすぐに兄の車に乗り込み、物が散乱した道路を仙台東部道路まで走り、盛土された道路によじ登って一命をとりとめました。「あの時、兄が迎えに来なかったら二人とも津波に流されていた。兄は隣人にも避難を呼びかけていたので、後から隣人にもお礼を言われました。けれど自分からは、周囲に声をかけることができなかった。近所に住んでいた人の中には、津波に巻き込まれて命を落とした人もいました。」と、渡辺さんは複雑な心境を話します。

東部道路から海の方を見ると、船や松の木、車などを飲み込んだ津波がものすごい速さで内陸に向かってきていました。渡辺さんらは今避難している場所も危険だと感じ、道路の下に停めていた車に再び乗りこんで、さらに内陸を目指して走り出しました。公共施設や学校などの避難所に向かいましたがどこも避難者でいっぱいだったため、急きょ名取市の内陸部山沿いにある愛島団地に向かい、兄の娘が住む家に避難することにしました。

避難先

避難先では、ライフラインが復旧するまで衣食の不足に悩まされる。

避難した愛島台では、5 日間過ごしました。その間、この家には渡辺さん夫婦の他に息子家族が身を寄せ、互いに無事である喜びを分かち合いました。さらにその後、義娘の実家である仙台市青葉区に移り、仮設住宅が完成する 5 月までお世話になりました。青葉区の避難先では水道とガスが止まっていたので、食事に困りました。また着の身着のままの避難だったので、着るものにも困ったといいます。

手続き

手話通訳がなく理解不足に陥り、申請や手続き等が一番の困りごとに。

この時、渡辺さんが一番困ったことがさまざまな手続きでした。り災証明書の発行や固定資産税の手続き、応急仮設住宅の入居申込など、津波で被災した渡辺さんはさまざまな手続きをしなければならなかったのですが、細かいところまでは理解が難しかったのです。さらに手続き先の窓口には手話通訳もいなかったため、窓口で説明してもらうことも難しい状況でした。しかし発災から約 3 ヵ月経った頃、全国からボランティアの手話通訳者が集まり、書類の記入等、手続きを手伝ってくれるようになったのです。現在も窓口では手話通訳を介して説明してもらえるので、大変助かっていると渡辺さんは話しています。

（2 枚目に続く）